

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：62601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23653309

研究課題名(和文) グローバル・ヒストリーに着目した歴史教育内容開発研究

研究課題名(英文) A Study of history education that focuses on global history

研究代表者

二井 正浩(Nii, Masahiro)

国立教育政策研究所・教育課程研究センター基礎研究部・総括研究官

研究者番号：20353378

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：日・英・米のグローバル・ヒストリー研究者の研究方法論を分析し、グローバル・ヒストリーの研究論には「スーパ・ナショナル(supra-national)」、「トランス・ナショナル(trans-national)」、「マルチ・ナショナル(multi-national)」といった三つのタイプがあることを明らかにした。そして、それぞれの研究論を背景にしたカリキュラムおよび授業を米・英で実際に収集することに成功し、各タイプに見られる歴史教育の構成原理や課題を明らかにした。そのうち特に、「トランス・ナショナル」と「マルチ・ナショナル」な歴史学習については、論文および学会発表で成果を公開することができた。

研究成果の概要(英文)：We have analyzed the researching methodology used by those researchers of Global History in Japan, the U.S. and England, and revealed that there are three types of the methodology; supra-national, trans-national and multi-national. We have collected the curricula and the recorded videos on the class activities which are based on each of the methodology in the U.S. and England. Then we have made it clear that the education on the history in each type have some problems and the characteristic principles. We published the results in our presentation in the conferences and the papers, especially about the type of trans-national and multi-national.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：歴史教育 グローバルヒストリー 歴史教育内容構成 歴史教育内容編成

### 1. 研究開始当初の背景

平成 20 年 1 月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」においては、「地理歴史に関する総合的な科目の設置については、具体的な教育内容の在り方等について今後更に検討する必要がある」と明記されている。これは、平成 18 年の世界史未履修問題等を契機に、中教審において地理歴史科の必修科目を何にするかについての議論が紛糾したことが背景になっている。これについては、平成 20 年 6 月の日本学術会議の公開シンポジウム「高校教育における時間と空間認識の統合 世界史未履修問題をどう解決するか」でも議論され、地理歴史科の各科目の現状報告や地理歴史科総合科目の設置などの提案がなされ、まとめとして今後の積極的な検討の必要性が強調された。しかし、研究開始当初、この問題については、現状を具体的に打開できるような提案はなされていなかった。

### 2. 研究の目的

本研究では、現行の高校地理歴史科における世界史の教育内容がグローバル化の著しい現在の状況に対応していないことが、地理歴史科における履修問題や総合科目の設置の困難さの根本的な原因になっているという問題意識から、近年、歴史学の分野で研究が進んでいるグローバル・ヒストリーに着目する。現在の地理歴史科の必修科目である「世界史」はナショナルな枠組みを基盤としているが、21 世紀になり、急速なグローバル化が進展する世界に生きていかなばならない生徒たちには、それに応じた新しい世界のとらえ方も求められていよう。グローバル・ヒストリーに着目することは、世界の歴史を民族や国家に視点を置いて語るだけでなく、それを越える地球的視点から語ることを可能にするはずである。

そこで、世界史学習をグローバル・ヒストリー学習に転換する視点、そして地理歴史科の構成科目である世界史・日本史・地理をグローバル・ヒストリーの視点から統合する可能性について本研究では具体的に検討する。グローバルな視点から捉えれば、日本も世界も別個のものとして扱うことは出来ず、柔軟に時間的位置（歴史）と空間的位置（地理）を設定して学習を展開することも可能になるからである。

### 3. 研究の方法

(1) 日・英・米のグローバル・ヒストリー研究の方法論を整理する。具体的には、前述した研究者のグローバル・ヒストリーの方法論を整理し、歴史教育に導入する手法を明らかにする。

(2) 明らかにした手法をもとに、日・英・米の歴史カリキュラム等を分析し、歴史教

育カリキュラム及び授業の課題を明らかにする。

(3) 具体的なグローバル・ヒストリーのカリキュラムおよび授業への導入の視点を整理する。

### 4. 研究成果

日・英・米のグローバル・ヒストリー研究者の研究方法論を分析し、グローバル・ヒストリーの研究論には「スーパ・ナショナル (supra-national)」、「トランス・ナショナル (trans-national)」、「マルチ・ナショナル (multi-national)」といった三つのタイプがあることを明らかにすることができた。そして、それぞれの研究論を背景にしたカリキュラムおよび授業を米・英で実際に収集することに成功し、各タイプに見られる歴史教育の構成原理や課題を明らかにすることができた。そのうち特に、「トランス・ナショナル」、「マルチ・ナショナル」のタイプの歴史学習については、論文および学会発表で公開することができた。

今後は、具体的なグローバル・ヒストリーのカリキュラムモデルと授業モデルの作成について研究を深め、成果を公表したい。なお、グローバル・ヒストリーの三つのタイプの特徴は以下のように整理できる。

#### (1) 「スーパ・ナショナル」タイプ

グローバル・ヒストリー研究のさきがけとなったのは、スタブリアーノス (L. S. Stavrianos) である。彼は「月からの眺望」を唱えて、今日の「地球村 (global village)」もしくは「地球共同体 (Global Community)」が如何に形成されてきたかという世界の一元化という視点で歴史を論じようとした。また、スタブリアーノスに続いて、地球共同体としての歴史の構築を強く主張したマズリッシュ (Bruce Mazlish) は、グローバル・ヒストリーを地球全体を展望する視点から描く歴史として定義し、「宇宙船地球号 (Spaceship Earth)」から宇宙から眺めたような歴史として描かれるべきものと主張した。ここでは、その取組を通じて、人間性に基づくグローバルアイデンティティ (global identity)、つまり、すべての人類が共有できるアイデンティティの醸成がめざされる。このような立場からグローバル・ヒストリー教育を具体的に構築しようとしている研究者の一人がクリスチャン (David Christian) であり、彼は、ビッグヒストリー (Big History) プロジェクトを通じてその教育の普及を目指している。

日本においても、羽田正は「世界史は、(中略) 地球市民という帰属意識を私たちの身近なものとし、ただひとつの地球の上で生きる人々が共同で難問に立ち向かうための知識の基盤を形成すべき」と論じ、地球共同体としての歴史を構築する立場、地球を宇宙から

俯瞰する立場から地球社会を一元化して歴史を構成しようとする立場と明確にしている。このような視点から国民国家を相対化しようとするグローバル・ヒストリーを本研究では「スーパ・ナショナル」タイプと位置づけた。

また、このタイプの授業実践として、イギリスの高校教師 Rick Rojers 氏の授業を実際に記録し、単元計画および年間指導計画を入手・分析することができた。その結果、このタイプのグローバル・ヒストリー教育は、人権問題や地域紛争などを Global Community の一員として歴史的に考察をさせることを通じて、Cosmopolitan Citizenship 及び Global Identity を培う傾向が強いことが明らかになった。

## (2) 「トランス・ナショナル」タイプ

マニング (Patrik Manning) は、21 世紀に入って、世界史の分野の研究は大いに進展すると同時に、いくつかのアプローチに分岐したと説明する。一つは、地域研究的アプローチであり、世界各地の地域研究に限界が生じ、隣接し接触する地域間の相互作用と関連性に着目しようとするもの。二つ目は主題的アプローチであり、特定の主題で世界全体の相互作用と関連性を見ようとするもの。三つ目は、広範な概念的領域へのアプローチとして、境界を越えた相互作用と関連性を研究するものである。これらに共通するのは、グローバル・ヒストリーが、国民国家や文明、人種、性、階級の枠を越えた「相互作用」と「関連性」に着目することを通して、一体化する人類としての人間共同体 (Global Community) の過去の諸関係性を説く試みであるということである。また、マニング同様、相互作用に着目したグローバル・ヒストリーを構想する歴史家にホプキンス (A.G.Hopkins) がいる。彼はグローバル・ヒストリーにおいては、全体 (普遍) と地方の間の相互作用 (interaction between the universal and the local) として構想することを強調した。日本においても、桃木至朗、秋田茂らは、広域の地域史・世界史を考えようとすると、必然的に比較と関連性を考えざるえなくなるとして、オブライエン (Patrick O'Brien) の主張をひきながら「比較」と「関係性」という概念の重視を提唱し、国民国家・国民経済に代わる広域の地域や世界システム・国際秩序などの新たな分析の枠組みを提示するグローバル・ヒストリーを主張している。このような「相互作用」と「関連性」等の概念を重視しながら、国民国家等の枠を超える範囲を対象にするようなグローバル・ヒストリー教育を具体的に構想しようとしている研究者の一人がダン (Ross Dunn) であり、彼の主催する World History for Us All (WHFUA) では、多くのアクティビティが開発されている。このような視点から国民国家を相対化しようとするグローバル・ヒストリ

ーを本研究では「トランス・ナショナル」タイプと位置づけた。

また、このタイプの授業実践として、WHFUA のアクティビティ作成にも参加しているアメリカの高校教師 Sharon Cohen 氏の授業を実際に記録し、単元計画および年間指導計画を入手し、分析することができた。この分析については、二井が「World History for Us All におけるカリキュラム構成原理」(全国社会科教育学会研究大会、2012 年 10 月 21 日、岐阜大学)、「グローバル・ヒストリーとしての World History for Us All のカリキュラム構成」(社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』No24, 2012, pp.51-60) および「グローバル・ヒストリーとしての World History for Us All のカリキュラム構成」(社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』No24, 2012, pp.51-60) で公開した。

この分析を通じて、このタイプのグローバル・ヒストリー教育は、国や文化を越えた領域を対象にしながら、それらの枠組みに囚われない Global Community の一員として歴史的に考察をさせることを通じて、Global Citizenship, Transnational Citizenship 及び Global Identity を培う傾向が強いことが明らかになった。

## (3) 「マルチ・ナショナル」タイプ

実際の社会や教室における「人種、民族、社会階層、性別などの様々な文化集団への理解と受容を促進し、各文化集団に対する差別や偏見を無くし、それらの人々に等しい教育の機会と文化的選択を提供」しようとする多文化教育としての歴史教育もグローバル化に関連する歴史教育としてグローバル・ヒストリー教育の一つのタイプと措定した。このような視点から国民国家を相対化しようとするグローバル・ヒストリーを本研究では「マルチ・ナショナル」タイプと位置づけた。

ここには、米・ニューヨーク州でかつて実施されていた Global Studies、および現在実施されている Global History and Geography などがその事例に相当する。この分析については、二井が「アメリカ・ニューヨーク州の高等学校社会科カリキュラムにおける地理と歴史の総合 Global Studies から Global History and Geography へ」(社会系教科教育学会研究大会、ラウンドテーブル「歴史総合・地歴関連カリキュラムに関する研究」、2014 年 2 月 9 日、大阪教育大学) で公開した。

この分析を通じて、このタイプのグローバル・ヒストリー教育は、多様な文化や民族、地域を学習の対象にしながら、相互に尊重する視点を重視した歴史教育を通じて、Multiple Citizenship、及び Multiple Identity を培おうとする傾向が強いことが明らかになった。また、このタイプは、三つのタイプのうちで、地理と歴史を融合した学習

カリキュラムの構成に最も適していることが明らかになった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

- (1) 二井正浩「グローバル・ヒストリー教育におけるナショナルアイデンティティの扱いに関する質的研究 - World History for Us All における単元 New Identities: Nationalism and Religion 1850-1914CE の実践を通して - 」(日本社会科教育学会『社会科教育研究』№120, 2013, pp.10-21, 査読有)
- (2) 原田智仁 Citizenship Education in Japan and the Genealogy of the Social ( *Research In Social Studies Education*, №19, 2012, pp.159-170, 査読有)
- (3) 二井正浩「グローバル・ヒストリーとしての World History for Us All のカリキュラム構成」(社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』 №24, 2012, pp.51-60, 査読有)

〔学会発表〕(計2件)

- (1) 二井正浩「アメリカ・ニューヨーク州の高等学校社会科カリキュラムにおける地理と歴史の総合 Global Studies から Global History and Geography へ 」(社会系教科教育学会研究大会, ラウンドテーブル「歴史総合・地歴関連カリキュラムに関する研究」において発表, 2014年2月9日, 大阪教育大学)
- (2) 二井正浩「World History for Us All におけるカリキュラム構成原理」(全国社会科教育学会研究大会, 2012年10月21日, 岐阜大学)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

二井正浩 (NII, Masahiro)  
国立教育政策研究所教育課程研究センター  
基礎研究部・総括研究官  
研究者番号: 20353378

(2)研究分担者

原田智仁 (HARADA, Tomohito)  
兵庫教育大学学校教育研究科・教授  
研究者番号: 90228651